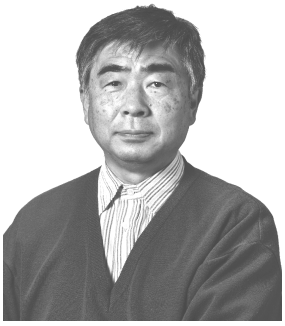
市立函館博物館
友の会々報
No.69

新会長ごあいさつ



令和３年度から市立函館博物館友の会会長の役割を担うことになった田原良信です。私は、平成元年度から５年間、函館博物館学芸員として考古・民俗・保存科学等の分野を担当し、平成21年度から４年間は博物館長として管理と運営を担うなど、博物館事業の業務に携わってきました。定年退職を機会に博物館友の会に入会して、博物館の支援を行うことを目指してきました。今後は博物館事業等と共催して協働する取り組みを行うなど、函館博物館の発展に寄与できるよう努めてまいりたいと考えております。

さて、博物館友の会の令和３年度の開催事業については、新型コロナ感染拡大の影響により残念ながら最小限の開催に止まることになりました。もどかしい思いでおられた友の会会員の方々も多かったと考えています。まだ、感染症流行の先行きが見通せない状況にありますが、新年度は博物館や他の市民団体との共催事業を軸に、友の会会員の多くの方々が積極的に参加してもらえるような取り組みを実施して行きたいと考えております。

次に、友の会内でも研究を継続してきている、新・博物館構想について若干触れておきたいと思います。函館博物館の収蔵資料は、地方博物館としては群を抜いて歴史的に重要なものが多いことで知られていますが、現在の函館博物館の建物は1966年(昭和41)に開館された、築50年を越える老朽化した建築物であり、全館を集中コントロールできる空調設備を持っていないという最大の弱点があります。このため、重要な博物館資料の保存にかなりの影響を及ぼすことが危惧され、私が博物館学芸員の時にも博物館資料の劣化・破損等の対策に苦心していた思い出があります。また、空調設備が無く、夏は暑く、冬は寒い展示室という厳しい環境であるため、観覧者の方々にも多々ご迷惑をおかけしていたこともありました。

貴重な博物館資料の保存と活用が図られ、博物館入館者の方々にも快適な展示観覧をしていただくためにも、できるだけ早い段階に新博物館構想について議論を重ねて行く必要性を感じています。まだ、具体的な方向性が決定したとの話は聞こえてきていない段階ですので、博物館内部での議論に加えて博物館活動を支援する立場である友の会会員の方々のご意見は大切なものと考えられます。近い将来において新博物館誕生の声が聞くことができるよう会員皆様の力添えを願っております。よろしくお願いいたします。

「博物館友の会」の未来について

前会長　若山 直

函館博物館の未来は、新総合博物館構想」を抜きにしては語れません。これは戦前の話ですが、「函館に国立大学を」という政府からの打診に対して、商工会は漁業と造船の町には必要ないと答えたと言います。函館病院が新築移転の際、友の会は跡地に「総合博物館」をとは発表したものの、「商業施設と違ってあれは金食い虫」だという意見が多く、沙汰止みになりました。

現在、博物館施設は本館に加えて、北洋資料館、北方民族資料館、郷土資料館、開港記念館(旧イギリス領事館)、文学館が点在しており、函館市は統合する案を模索中です。統合するなら是非「総合博物館」を。一度の工事で無理なら、北洋資料館の一部を本館の隣にある旧図書館(現在空きビル)に移設展示し、金森倉庫群を含めて、徒歩と電車で回遊する「博物館ウォーキングコース」を設けたい。

気になるのは、総会のたびに「若い方を入れて云々」という意見が出ること。少子高齢化の時代なのでこれは無理。若い世代には大いに働いて稼いでもらい、利益の一部を歴史研究にまわす。博物館運営の手伝いを高齢ボランティアがやれば、高齢者の生き甲斐になり、健康寿命が延びる。

縄文遺跡が世界遺産になった理由の一つは、15,000年以上も戦争せずに定住生活をおくったこと。縄文人の知恵、SDGsの見本として、コロナ禍後の函館の目玉になることは間違いない。友の会はその中心となる組織です。会員の皆様、未来の函館の為に元気で頑張りましょう。

「雑　　感」

前副会長　佐藤 公郎

函館山の雪も徐々に消え、春の息吹が感じられる季節になりました。この２年余り「コロナ、コロナ」で「友の会」の活動も制約され、一日も早い終息を願ってやみません。コロナ禍にあっても極めて感染リスクの少ない所は南極・北極、すなわち「海」ではないかと思います。

私は例年５月末～１０月頃まで、２・３日～７日程度のヨットクルージングを楽しんでおります。昨年は日本海クルーズと称して、佐渡の手前に位置する山形県の「飛島」まで７日間のクルーズを楽しんできました。日本海沿岸の「漁港」に停泊し、近くにある温泉を楽しみながらクルー（仲間）３名と永年夏休みを過ごしております。ヨット名は「ベルファム」定員８名・ヤマハ３５Ｓ。日頃は緑の島に係留しております。ヨットクルーズで一番大事なことは安全第一で無事帰港する事です。そのためには、絶えず変化する風・波・漂流物・そして他船の位置を確認するための「見張り」が一番重要です。レーダー・ＧＰＳ・各種無線機は装備しておりますが、「見張り」に敵うものはありません。私は一応キャプテンですが、航海中は「操舵手」、他の２名は「一等航海士」で、内１名は「司厨長」を兼務し、朝・昼・夜と高級レストラン並の食事を振舞ってくれます。

今年のシーズンも存分に楽しむことが出来ればと今から準備しておりますが、気がかりが一つあります。北の国が渡島半島沖に向けて「ロケット」の発射が無いことを祈るばかりです。

「手元に残る資料（史料）」

会員　茂木　治

私が様々な会に顔を出していたのは、そこで発表される講演と戴ける資料（史料）とにありました。もとより講演にはとても興味をもちますが、その内容をまとめた資料の価値はとても得難いものです。今はパソコンを使った発表が多くなり、渡される資料は簡単なものであったり、時には何もないこともありますが、ときには驚くほど内容のある資料を戴けることもあり、そんなときはとても幸せでした。そんな会のひとつに市立函館博物館友の会があります。函館博物館友の会は、文字通り博物で、歴史考古を始め動物植物に関することがらに取り組んでおり、出版物は、図録、画集、絵はがき、しおりなど多数ありますが、なかでもその活動発表の場である定期出版物は友の会会報を始め、友の会ニュース、友の会通信、そして雑誌「はこだて」等々全ては現在でも大いに役立っております。なかにはワラ半紙タイプ印刷のものもありますが、読み直す度に私の知識に刺激を与えてくれます。これらは、昭和45年の友の会発足以来、休刊した後の復刊、休刊したままのものもあって、その繰り返しに不満を感じたこともありましたが、その時々の文には必ず「より活発な・・」との言葉がみられ、当時私も会に携わっていた方々が会の運営にご苦労なさっていたんだなあ、と考えることのできる年齢になりました。私が所属しているある会では、年4,000円の会費では30名以上の会員がいないと月１回の講演は難しいといいます。博物館友の会が、年2,000円会費で、これまでの行事を続けながらも、アイディアを出して新しい企画に取り組み、会を盛り上げておられる、友の会の運営の方々のご苦労は大変なものであろうと頭が下がります。また、いずれの会でも、問題は会員の高齢化と減少ですが、今でもよい発表内容資料や内容を求め、新たに参加しようとする方々は少人数ながらも毎年必ずいらっしゃいます。その方々にどう答えていくか、どの会でも取り組まねばならない課題なのでしょう。

市立函館博物館・企画展『大船・垣ノ島遺跡と世界遺産』を見て

副会長　木村 裕俊

平成３年８月27日（金）、表題の企画展見学会が開催されました。この度の企画展は、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録への長い活動の結果、登録が決定し、これを記念して開催されたものです。「北海道・北東北の縄文遺跡群」とは、北海道、青森県、秋田県、岩手県の４道県17ヶ所の遺跡群ですが、函館からは「大船遺跡」と「垣ノ島遺跡」の２か所が登録されました。私は、縄文文化の進展過程と縄文人の歴史に興味がありましたので、その観点から説明を聞かせて頂きました。寒い旧石器時代が終わり暖かい縄文時代が始まると、大型獣を追いかけていた人々は、内陸から海に近い土地へと移動し、食料も食性植物や海から採れるものへと変化していったそうです。縄文文化は非常に長く、１万年以上も続きました。そのため、時代区分を６つに分けて整理していました。縄文時代も前期後半の頃になると生活が落ち着いて、海岸に面した段丘上に定住生活を行うようになります。縄文時代は長い時代ですから、様々な文化が花開きました。他地域との交易もありましたし、独特な土偶の製作もありました。縄文時代の後期には、階級の差が芽生えたのでしょうか。ヒスイなどの威信材も見られるようになったといいます。今回の企画展では「大船遺跡」と「垣ノ島遺跡」を中心として、函館市内の縄文遺跡から出土した遺物も併せて、縄文時代全体を説明していました。

最後に、世界遺産への活動は平成11年から始まりますが、国内の候補地も多くあり、なかなか選んでもらえない中で、粘り強く活動を続けられた関係者の多大な努力の成果が実を結ぶことになりました。先ずは「世界遺産への登録」おめでとうございました。

令和３年度の主な事業（報告）

１．　友の会会報の発行

(1) 友の会会報 第69号（令和４年３月31日発行）

２．　例会・講座等の開催

(1) 市立函館博物館企画展の見学会　　令和３年８月27日（金）　参加者１０名
テーマ「大船・垣ノ島遺跡と世界遺産」
解説者 市立函館博物館 学芸員 佐藤 智雄 氏

(2) 会員発表会　　令和３年10月２日（土）　函館市地域交流まちづくりセンター　参加者６名
テーマ「これからの友の会の運営と方向性」
発表者 市立函館博物館友の会 副会長 根本 直樹 氏

(3) 博物館や市の市民団体との共催講座の開催
①「函館の歴史的風土を守る会」との共催によりワークショップを開催
② 令和３年１月から３月にかけて「函館おもてなしガイド」との学習会を計画したが、
新型コロナ感染拡大の影響を受けて、３回の学習会ともに開催中止となった。

３．　博物館事業の後援・協力

(1) 市立函館博物館で開催の企画展等の後援
(2) ボランティア活動に向けての準備・検討
博物館側の依頼事項を会員へ提示したが、希望者は皆無であった。

４．　刊行物の刊行・頒布等

・ 市立函館博物館で開催した特別展・企画展の図録
・「ガイドブック函館の文化財」「金子幸正作品集」「北の昆布展」「函館とロシアの交流」
・ 中空土偶携帯ストラップ、函館の絵はがき

５．　総合博物館将来構想等の研究

(1) 博物館学芸員との学習会など、対話機会を設ける
(2) 新・博物館構想への市民の関心の醸成への準備・検討
今年度は、コロナ禍の影響により博物館学芸員との学習会開催が出来なかった。

６．　会員数（令和４年３月３１日現在）　６９会員

一般会員　６０名
企業会員　　９社

現在、次の企業・団体から協賛をいただいております。

・(株) エスイーシー　・金森商船（株）　・(株) 五島軒　・五稜郭タワー（株）　・佐藤電機工事（株）
・(株) 佐藤公郎建築設計事務所　・(有) 三和印刷　・(財) 相馬報恩会　・道南清水サッシ(株)

（敬称略・50音順）

市立函館博物館友の会会報 №69

令和４年３月３１日　発　行
〒040－0053
函館市末広町４番１９号
函館市地域交流まちづくりセンター内
電話・FAX　0138-27-3344